

学内 LAN 環境を活用したプレゼンテーション評価のフィードバック

Effective Feedback of the Evaluation of Classroom Presentations for LAN environments

安間一雄

玉川大学文学部外国語学科

〒194-0032 東京都町田市玉川学園 6-1-1

TEL 042 739 8192 FAX 042 739 8847

E-mail: amma@lit.tamagawa.ac.jp

Abstract: Immediate feedback is vital in any educational scenes, particularly for learner-centred activities. The target class, intended to improve general English proficiency using Macintosh computers and internet tools, is taught weekly to non-English major students in their first year. Classroom and outside-class activities involving various kinds of skills and degrees of intensity culminated in student presentation projects in which the emphasis is on improvement not only of students' articulation, eye contact, and body language, but also of comprehensibility of their message. These aspects of significance have a powerful appeal when the students' insufficient performance is indicated through peer evaluation. Up to the present, however, the collection of the students' evaluation data has been made manually, mostly by the teacher. As a result the feedback has been unintentionally delayed till the next week, at earliest, when the memory of the presentation is no longer clearly retained. The AppleScript and HyperCard programmes which the present author wrote enable the teacher to process the evaluation data instantly and provide graphical summary documents to the students immediately after the presentation finishes. The improved feedback procedure has acquired favourable reactions from the students. Also, it has a potential of application in other subject areas in the LAN-adaptive classroom situation.

Keywords: feedback, presentation, peer evaluation, AppleScript, HyperCard

1. はじめに

筆者は 1994 年度より東京薬科大学で Macintosh を使った英語の授業を担当してきた。過去 4 年間は総合的な英語力の向上とともに表現能力の育成を目指して英語プレゼンテーションを授業の主要活動として取り上げている。

プレゼンテーション時には仲間の示す評価が教育上有効であるとされる^[1, 2]。当該授業では聴衆である他の学生に 8 項目にわたる数値評価をさせ、その結果をグラフ化したファイルを発表者に同一授業中に渡している。フィードバックの時間を短くすることで学習効果を高めることが狙いである。従来の授業形態では、一旦学生の評価を回収し、教員が集計して次週の授業時に返却していたため、発表学生へのフィードバックが遅くなり関心も効果も薄らいでしまっていた。今回筆者が開発した HyperCard と AppleScript による自動集計プログラミングにより、発表者が発表を終えて着席する頃までにはフィードバックグラフを提示することが可能になった^[3]。これにより学生の記憶の新しいうちに評価を返すことができるようになったばかりでなく、教員の集計作業の省力化も実現することができた。

2. プレゼンテーションの内容と目的

東京薬科大学生命科学部では毎年新入生全員にノート型パソコンを購入させ（2001 年度は Apple 社製 iBook）、それに基づいて専門科目及び語学科目のカリキュラムが運営されている。英語の必修科目としては筆者の担当する授業

のほかリーディングと会話に相当する授業があり、筆者の授業は Macintosh パソコンを用いて CALL を行うことを目的としている。学生は毎回 iBook を持参し、卓下の情報コンセントに接続して使用する。授業は週 1 回 45 分で、学生数は各クラス約 25 名である。また、授業には TA (teaching assistant) が常時待機している。

CALL による英語学習のまとめとして年間 2~3 回のプレゼンテーションを行う。年度末のプレゼンテーションでは、学生はグループで専門分野（生命科学及び環境科学）のなかからトピックを 1 つ選び、簡潔にまとめて紹介するとともに他の学生に意識調査等のアンケートを取りそれを集計報告することが求められている。ここに至る過程で学生は英語のリーディング・ライティング・スピーキングのみならずアカデミックな発表形式や専門用語の平易な表現などのスキルも習得する機会が与えられる。

プレゼンテーション時には、発表学生は用意した AppleWorks 書類（スライドショー）をプロジェクターに繋がった教員用パソコンで提示する。また、教室内のすべてのパソコンには画面共有ソフト Look@Me が動いており、教員用パソコンに表示された画面を聴衆学生側でモニターすることができる^[4, 5]。

1 回の最終プレゼンテーションに対して数週間の練習期間を設け、ミニ研究の途中経過の報告という形ですべての学生に交替で発表をさせる。最終回以外の発表においては、教員が学生の発表をビデオテープに収録し、それを編集し